

白川先生との対談の夢

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所学外顧問 加地伸行

白川静先生の名著『孔子伝』（昭和四七年・中公叢書）が、平成三年に中公文庫に収められることになったとき、先生から私に解説を書けという御下命があった。

光栄なことであったので拝承を即答申し上げた。その理由の一つは、私自身が昭和五九年に孔子の伝記（『孔子——時を越えて新しく』・集英社）を書いていたのであった。

すでに先生の孔子伝があるなかで新しく孔子の伝記を書くというのは、苦しくも辛くもあった。しかし、中国学それも中国哲学を専攻した者にとって、孔子の伝記を書くというのは、押えがたい願望であり、精魂をこめて書ききった。そのあとのことであったので、私としては、まだ余韻が残っていたと言つてよい。それだけに、先生の『孔子伝』の解説を書かせていただくのは、本当に嬉しくありがたかった。

その書き出しに、故高橋和己の文「わが解体」の一節を引用した。そこには、昭和四十年代前半において日本のほとんどの大学において発生していた大学紛争を背景にして、立命館大学の紛争状態が記され、その中にS教授の超人的な研究姿勢のことが書かれている。すなわち、あの紛争の大変な中でも研究を続ける姿である。そのS教授が白川先生であることは言うまでもない。

この私の引用以来であろうか、白川先生のお人柄を描く際、高橋のこの文がよく使われている。ことに俄にわか白川ファンにそれが多い。世の中とはそのようなものであろう。

さて、あの解説執筆の折は、私自身が孔子の伝記を書いたあとであり、その立場から『孔子伝』を再読したが、今回は、私

自身が『論語 全訳注』（講談社学術文庫・平成十六年）を刊行したあとであり、その立場から改めて『孔子伝』を読み返すこととなった。

わけても、その第五章『論語』について」が興味深かった。

もちろん、研究者はそれぞれ自分の見解を有するのが当然であるので、たとい尊敬する白川先生の説であっても、私と意見が必ずしも一致するとは限らない。

先生は、孔子の理想主義者としての面を全面的に出しておられ、孔子はアイデアの場に立とうとした、すなわちノモスの外に立とうとした、とされる。

ノモスとは古代ギリシャにおける観念であり、俗世の制約（法など）とでも言うべきもののようなものである。アイデアも同じく古代ギリシャにおける観念であり、永遠なるものとも言うべきもののようなものである。

私は古代ギリシャ哲学について無知であるが、白川先生はアイデア・ノモスを上述のような意味として使っておられるように思う。あえて私が短縮して言えば、聖（アイデア）と俗（ノモス）ということでもあろうか。

先生はこう述べておられる。「孔子は、ノモス化しようとする社会の中で、仁を説いた。しかしもはやアイデアへの福音が受け容れられる時代ではなかった。……孔子は、ノモスの外に立とうとした。……孔子は巻懐の人となった。このようなアイデアの場としての仁を理解しえたのは、おそらく顔回だけであろう」（文庫本・二九一ページ）と。「巻懐」とは、『論語』衛霊公篇「邦に道無ければ、則ち巻いて懐にす可し」の「巻いて懐にすべし」すなわち才能を隠して世を退くという意味である。

確かに孔子は現実社会の程度の低さに不信感を抱いていた。理想主義と現実とのギャップに苦しみ、不遇の生涯となった。まさにノモスの社会に対する絶望があった。

しかし、孔子は最後まで現実社会との接点をなんとかして持ちたいと思ったのではなからうか。

孔子の最晩年期に、次のような①・②二つの話が残っている。これは、流浪の旅を終えて故国に帰り、七十歳を越えた晩年、形式的には引退生活を送っていたころの記録である。

① 弟子の冉有が政庁から帰ってくるのが遅かったときがあった。そこで孔子は、なぜかとたずねたところ、大事件が起りましたので冉有が答えた。すると孔子は、いや小事件であろう。もし大事件であるならば、自分は現職ではないが、前大夫であるので、私に相談があるだろうから、と述べた。（『論語』子路篇）。

② 孔子の祖国である魯国の隣国は、大国の斉国である。その斉国において、陳成子が主君の簡公を弑した事件が起きた。その報に接するや、孔子は髪を洗い湯あみし身を清めて（沐浴）、魯国の君主である哀公に拜謁し、陳成子討つべしと進言した。哀公は国老の三卿に話せと返答したので、孔子は三卿に討伐のことを述べたが、だれも賛成しなかった（『論語』憲問篇）。

この二つの話の内容は、それこそ孔子がノモス的世界の内に立つものではなからうか。

私は、孔子はノモス的世界に絶望しつつも、しかし人間はノモス的世界の中で生きてゆくほかないので、なんとかその中でアイデアをすこしでも現実化しようとして、もがき苦しんだ人ではないかと思うのである。

もし、真にノモス的世界の外に立ち、そこで生きようとすれば、現存の人為的なものと縁を絶つ老子・荘子のような生きかたをせざるをえない。そのような生きかたをする人間は、『論語』の中に登場している。白川先生は、ふつうは隠者と称せられるそうした人々として、狂接輿などの人物を例としておられる。

長沮・桀溺という二人も同じく隠者である。流浪の旅をし、政治家として新しい場所を求めている孔子に対して、この隠者二人はそんなことはやめろと言う。しかし孔子は、この世の一般の人々と「与にするに非ずして、誰と与にせん」（『論語』微子篇）と言いきっている。

私にとつての孔子像は、そのアイデアを説く場は、ノモス的世界の内であって、外ではない。しかし、ノモス的世界はアイデアを拒否する。だが孔子は、あえてアイデアをノモス的世界において説いていった。当然、それは報いられず失敗し傷つく。その挫折のくりかえしが孔子の生涯であったと考える。

このたび白川先生の『孔子伝』を再読し、先生における孔子のイメージと私のそれとの相違を改めて知ることとなった。

しかし、それは見解の相違ということであって、真偽の問題ではない。人はさまざまな見解を持つからこそ、知見が豊かとなり、複眼的となるのである。

これは、白川先生のお仕事の一端についての私の異見である。孔子解釈についてその他にいくつかの異見がある。それらを含め、白川先生におたずねしお教えを乞いたいことがいくつもあり、対談いたしたかった。

しかし、いつの日にかと思っていたその機会に恵まれず、遂に願望のままに終わってしまったのは、かえすがえすも残念であり、我が生涯における痛恨事である。

そういう私にとってのこれからは、白川先生の作品を拝読することが、先生との対談となるということであろうか。とすれば、テーマは山ほどあることになるではないか。先生の御逝去は残念であるが、先生との対話をこれから御著書を通じて続けることができると思えば、御逝去の哀しみをいくぶんか耐えることができそうである。